

「英米文学演習」指導メモ

浜 口 み づ ら

目 次

はじめに

1. 目 標
2. 指 導 方 法
3. 教 材 (テ キ ス ト)
4. 評 価

おわりに

は じ め に

中学校・高等学校とちがって、一定の学習指導要領や検定教科図書をもたない大学において、各教科目の目標ならびに指導方法の設定、教材の選択は一にかかって担当者の双肩にある。これは、中学校・高等学校の教師たちからは大いに羨しがられる点であるが、大学教師の自由とって謳歌するには余りに多くの問題がからみつき、明確な束縛がないだけに、うっかりすると自責の念のみが残る結果となる。そこで、日々の指導に必要な不可欠な目標・指導方法・教材の選択・評価の方法について、拙速ながら仮説を立て、試行錯誤のうちに五年間を過ぎた経過をここに報告し、より適切な方法発見への一歩としたい。

1. 目 標

教科目の目標を設定するにあたっては、まず指導の対象となる学生の実態を把握せねばならない。しかし、赴任の初年度は、誰もがそうであるように、全く白紙状態のまま教材を選択せねばならなかった。そして当然のことながら、学生たちからは手痛い反撃を受けた。もちろん、学生が激しく抗議してきたという意味ではない。むしろ、かなり忠実に、指導についてこようと努力してくれた。にもかかわらず、一年を経た時点においても、学生・指導者双方にしっくりしないものが残った。その原因の第一は、教科目の目標を、学生の実態や他教科との関連において設定しなかったことであり、第二は、そこからくる教材の誤った選択にあったと考える。

「英米文学実習」担当ときいたとき、イメージとして浮んだのは、ひとつの文学作品を核として、同一作家の他の作品や、同系の作家たちにまで手をのびし、楽しい文学よもやま話を交すことであった。しかしこれは、極めて一方的な解釈であったことを知らされた。ちなみに昭和49年度学生要覧に掲げた英米文学演習の目標は「優れた短編作家の珠玉ともいうべき作品をしみじみ味わってみたい。英語そのものよりも、背後にある人間の心に迫る読み方にまで深めていきたい。」とある。学生の実態を知らないまま、漠然と目標を示したのである。

第一年度で把握した学生の実態を列举すると次のとおりである。

- 1) 文学への関心がうすい。文学鑑賞の経験がない。
- 2) まとまった英文が速く読めない。逐語訳をしないと読んだ気になれない。
- 3) 通読したものを今一度まとめ、前後を関連づける読み方などしたことがない。
- 4) 動作や状況をイメージ化するような読解には馴れていない。
- 5) 作品の内容に即した音読ができない。

以上は、「英米文学演習」の授業展開のうえに必要な最少限度の基礎であっ

「英米文学演習」指導メモ

て、英語を学習しようと志すものには当然あるべきものだと考えていた。しかしこれらの欠落は学生だけの罪ではない。これまでの受験勉強という学習状況の中で、心ある語学教師がすすめようとしても、圧殺されがちな片隅の努力に負うところのものだからである。

一方、本学の教科目組織を見ると、必修科目において、「講読」と「英米文学演習」（ABコースのみ必修）を除いて、まとまった英文（評論であれ、文学作品であれ）を読む機会はない。適確、迅速に英文読解ができないでいて「オーラル」も「英文作法」も、はたまた「スピーチ」も満足に習得できるわけがないと考える。後者諸科目を支えるものとして「購読」や「英米文学演習」を検討する必要を痛感した。

というのは、「英語科」のみの短期大学として、その看板のもとに集ってくる学生は、大部分が「英文科でなく、英語科であることに魅かれてきた。」「会話が上手になりたい。」「将来英語を使う仕事につきたい。」という淡い希望をいだいたものたちである。だが、幻想は美しく、現実はきびしい。夢を現実とするためには、少しは苦勞もしてもらわねばならない。言語の使用は、たとえそれが母国語であっても仲々に難しい。発音を矯正し、少しばかりの idiom を暗記したところで、会話が成り立つものではない。一時花盛りであった「話し方教室」（もちろん日本語の）がやや下向気味なのは、結局、話すことはその領域の訓練のみで上達するものでないことを、実際やってみてわかってきたからではなからうか。ともあれ「英文科」と称さず「英語科」とする限り、今後も「文学などは好きでない」が、「英語を使えるようになりたい」という実利的な学生が集ることは間違いない。それだからこそ、入学時の学生の希望に安易に迎合しないカリキュラムの確立が望まれるのである。このように考えると、まとまった英文を読む機会の少い学生に、ひとつの作品というまとまりあるものを与え、英語の理解とともに、行間を読み取り、登場人物の発する言葉（台詞）の効果などに気付かせてゆく指導がこの教科目において可能であり、他教科目ではなし得ないものではないかと考える。幸い、講読をも担

当しているのに、ふたつの教科目の目標と指導方法にどう差異をもたせるか、工夫を試みつつあるが、今のところ「講読」は正確な読解を主目標とし「英米文学演習」では、細部にこだわらず、多量にすすめて、事件の進展の把握、人物の理解へと導くことを眼目にしている。

昭和53年度の学生要覧では、第1学年「英米文学作品をかなりスピーディに読むことで文学鑑賞の基礎を養う。単なる訳読に留らず、表現の背後にある著者や登場人物の心の動きを感じ取り、英文も生きたものとしてとらえる技法を習得する。」第2学年「英文学史、米文学史の肉付けとなる科目としたい、文学作品を通読していく中で、鑑賞・批判はもとより、人生を考えることも試みたい。従って、十分な予習と読後のまとめが要求される。」となっている。

結論づけると、速読、深層の内容把握、主体的読解を目標とすると表現してよいのではないかと考える。

2. 指導方法

速読の訓練をもめざすのであるから、1時間（50分）に3～5頁の進度とする。もちろん予習することを原則とし、余暇に辞書を引かずに読み進み、結末の部分を見ておくよう指示する。内容について質問しながら、指導者が音読をはさんでゆく。学習した部分は、次時のはじめに数名音読させる。（所要時間5～10分）この場合、内容を充分理解した読みを要求する。悲しい台詞は悲しげに、著者の皮肉をこめた解説はそうように表現するよう求める。いわゆる Oral interpretation の学習活動である。

問題は質問である。作品のポイントとなる部分をねらって質問し、その解答を結び合せてゆくと、作品が鮮明に理解されるという方向で設問する。やや複雑な表現についてのみ解説したり、質問したりするが、殆んどは、「次に彼はどうしたか」「なぜ彼女はそうに答えたか」といった類のものである。入学当初、学生はこうした質問に極めて不馴れで、何が何でも和訳で答えようと

「英米文学演習」指導メモ

する。自分のことばを持たずして、どうして言語学習ができるか、と叫びたい一方、今も中学校の英語教育に根強くある“pattern practice and contrast”の指導方法の弊害をもろに受けている学生たちを気の毒に思うのである。

上記の如き質問の連続だけでは単調になるし、学生たちに欠落するものを補うには充分ではない。文字や作品が生き生きしたものになるためには言語のイメージ化が必要だと考える。イメージが浮ばないまま英語を日本語に置き換える作業（その逆も）をするのでは、苦痛のみが大きく、学習の効果は少ない。そこで、具体的表現の場合、正確な視覚的イメージを結ばせるよう仕向けている。

例えば、A Day in the Dark の冒頭部分の状景描写は、絵画化させるのに極めて都合のよい英文である。川がどの方向に流れ、橋がどこにかかり、森や荒廃した城がどの位置に見えるか、実際に絵に描かせる。A Circle in the Fire の物語の始まりも、三人の登場人物の位置、とっている姿勢などをまざりしっかりイメージ化するために略画を描いたり、Mrs. Prichard の姿勢を学生に実演させたりする。

“She moved away; the blue of her rebozo became a dancing spot in the heat waves that rose from the gray-red soil.” という “Maria Concepcion” の美しく、印象的な部分では、メキシコのキラキラ輝く太陽の下を、青い一点となって消えてゆく若い人妻の姿を、眼をつむって思い浮べてもらう。彼女のこれからの数奇な運命は、この短い描写に暗示されているのであり、この部分のイメージ化は作品の理解へとつながると思うからである。

更に、同様の主旨から意識的に取り上げるのは、作中人物のジェスチャーである。具体的にどのような動作であり、何を意味するのか。些細なことではあるが、英文に添ってその姿勢をとらせる。実際、思いがけない誤解をしている場合がある。イメージが間違っていれば、正しい理解には到達できない。抽象的に東西ジェスチャー比較論をやっているよりこの方が余程身近い。外人教師も多数いることだし、日頃観察の眼を向けて、発見してくれることを望んでい

る。次にこのような目的に活用しやすい具体例を掲げておく。

Maria Concepcion took the fowl by the head, and silently, swiftly drew her knife across its throat, twisting the head off with the casual firmness she might use with the top of a beet.

(Maria Concepcion: K. A. Porter)

“My bouquet, eh?” She grasped the bundle of roses, thorns and all, and took a long voluptuous sniff at them, as though deceiving herself as to their origin—showing me she knew how to play the game, if I didn’t—

(A Day in the Dark: E. Bowen)

Esther finished the glass and gave it to Amos. He put it on the table and turned around just in time to see Esther lifting her skirt near the hem with a thumb and forefinger and carelessly throwing one leg a cross the other.

(An Autumn Courtship: E. Caldwell)

...and the young man indicated to Sally Poker with a motion of his thumb that she could take the old man back to his seat now so that the next person could be introduced;

(A Late Encounter with the Enemy: F. O’Connor)

Mrs. Prichard heaved herself from the chimney and waved her arm in a fierce circle but he pretended not to hear.

She emphasized each word with the trowel.

“Well, if it ever did,” Mrs. Prichard said, “it wouldn’t be nothing you could do but fling up your hands.”

(A Circle in the Fire: F. O’Connor)

要は、言語がはっきりしたイメージとして捉えられなければ学習したことにはならないし、ましてや使えるものとして役立たない。従って学生たちが怠っている入学初期の目的は達しられないと考えての試みである。

作品を読み終ると必ずレポートを提出させる。ひとつの作品を再度通読し、

「英米文学演習」指導メモ

味ってくれることを期待するからである。実用的英語に関心をもつ学生であることを頭において、文学鑑賞だけを要求しない。文体の側面を取上げてよいことを附加しておく。しかし、大多数は話の筋や登場人物についての感想である。第一回目のレポートは大へんお粗末である。たった卦紙一枚分を要求するのだが、充分埋め切れないものがある。模範的なものをクラスで読んで聞かせ、誤字や字句（日本語）を訂正して返す。日本語が書けない日本人がふえていることが取沙汰されているが、自分の頭でまとめたものを書かされた経験が少ないので無理はない。誤字を書かない、出だしと結びを揃える（主語と述部の不揃いが多い）、必ず読み返して、清書して出すことなど指示すると、次回からはかなり満足なものが手許に集る。そして一回分のレポートの枚数を増してゆく。書くことが読み方の緻密さ、深さへと照射されることをねらったの試みである。時には、朱を入れながら、自分は一体英語の教師か、国語の教師か自問することがたびたびある。まぎれもなく語学の教師なのだと納得する。

一年間この方法を貫いてくると、学生の受動的であった英語への対し方が能動的になってくる。学習とは注ぎ込まれるものだと考えている今の学生たちの心を自発的に動かすことは、教師として何より楽しい。進度に気をとられて、性急に通りすぎてしまった箇所にもメスを入れたレポートが提出されるようになると、教師であることの喜びをしみじみ感じる。

3. 教材（テキスト）

上記の目標や指導方法に適合した教材を選択することはいうまでもない。また、指導者の好みだけにこだわらず、学生の現時点での感覚にマッチしたものを選ぶことも大切だと考える。一応五年間の教材一覧表を掲げてその是非を論じてみたい。

「英米文学演習」教材一覧表

昭和49年度

2年前期 O. Henry at His Best 英光社

後期 Between the Acts by Virginia woolf ペンギン

昭和50年度

1年前期 A Circle in the Fire by Frannery O'Conner 朝日出版社

後期 A Christmas Carol by Charles Dickens 北星堂

2年前期 Poetry for You by C. Day Lewis 南雲堂

後期 Flowering of Judas and Other Stories by Katherine
Anne Porter 南雲堂

昭和51年度

1年前期 Life With Mother Superior by Jane Trahey 金星堂
アメリカ女流短篇集 研究社

後期 Poetry for You by C. Day Lewis 南雲堂

2年前期 A Cup of Tea and Other Stories by Katherine Mansfield
南雲堂

後期 A strawberry Season and Other Stories by Erskine
Coldwell 成美堂

昭和52年度

1年前期 A Circle in the Fire

後期 A Day in the Dark by Elizabeth Bowen 朝日出版社

2年前期 A Cup of Tea and Other Stories by Katherine Mansfield

後期 A Strawberry Season and Other Stories by Erskine
Coldwell

昭和53年度

1年前期 The Road to Yesterday by L. M. Montgomery 篠崎書林

後期 A Circle in the Fire by Frannery O'Conner

2年前期 Flowering of Judas and Other Stories by Katherine
Anne Porter

後期 Doris Ressing's Choice Stories 朝日出版社

先にも述べたとおり、初年度（昭和49年度）の教材選択は失敗であった。余りにも学生の能力を買いかぶりすぎていたことと、文学の文字にとらわれていたことが原因だと思う。そこで、昭和50年度からは、平易な英文で事件の進展があり、人物が活動する作品を選ぶことにした。特に1年の前期では「英米文学演習」でねらう英文の読み方に馴染ませるため、やさしく面白いものを選ぶよう留意した。また教科目のタイトルが「英米文学演習」とあるので、アメリカ作家のものと、イギリス作家のものを前期・後期で読ませることもひそかに心にきめていることである。それに女子学生として、女流作家のものを読ませたいという気持ちも捨てきれない。

以上のような漠然とした視点から作品を選び、授業をすすめてきたが、概ね、いいテキストに出合えたように思う。学生にアピールしたテキストは何回か使用して、指導方法を改善してゆくように心がけているが、相手がかわれば、新たな発見があることは興味深い。

一覧表でわかるとおり、短篇集を好んで選ぶ。その理由は、ひとつの長篇でその作家の作風を掴むことは困難だが、いくつかの短篇に接すると、その作家の作風が容易に感じられると思うからである。短い2年間のわずか週2時間の授業でやれることには限度がある。多くを望みすぎるとは、元も子もなくなってしまう。

また、テキストを選ぶ規準として現代作家のものをと考えている。「話す力」をつけたがっている学生に、できる限り「話しことば」に近く、活用できることばを与えてやりたいと考えるからである。

O'Conner や Anne Porter のものは、英文そのものがやさしいうえに考えさせる材料を提供してくれるので、目標や指導方法によくマッチしてい

て用いやすい。また英文学といえば、英詩を想うものにとって、Lewis の “Poetry for you” は捨て難いテキストである。詩といえば難解なものだときめつけている学生に、詩の起源を知らせ、やさしい詩に出合わせてことばの美しさ、意味の深さを理解させてゆくことが、このテキストでは可能である。そのうちこのテキストに添って読ませたい詩を集めて side-book をつくってみたいと考えている。“A Christmas Carol” もクリスマス・シーズンを迎える後期に使うのによい教材である。名作のひとつくらいはみっちり読ませておきたい。

総じてイギリスものは地味で、描写が綿密なので、現代っ子にはとっつきにくいらしい。Bowen にしても、Ressing にしても、とかく進度がおくれ勝ちになる。従って、これらは後期にまわして考えながら読ませるようにしている。

毎年同じテキストを使用するのは指導者にとって面白味がうすれるので、新刊本が送られると目を通してレパトリーを拡げる努力をしているが、適切なものにはなかなか出会い難い。しかし、年毎に一冊は新しいものを加えようとは試みている。

4. 評 価

指導の結果、目標へどの程度到達したかを見るのが評価である。従って、語彙力や和訳能力をみるような出題はしない。むしろ、直接英語でどれだけ内容を理解したかをみることを重点に出題する。訳本のあるものもあるが、訳本にたよっていたのでは解答できない問題を出すことに苦心している。

<例>

次のことばは①誰が②どんな状況下でいったものか、前後のことも含めて説明しなさい。

・ “So Maria Rosa has a man!” (Maria Concepcion)

「英米文学演習」指導メモ

- ・“Good God, woman, you do have nerve. I can't do that. It gives me the creeps.
- ・“Don't you know what this is? This is a screw head for a coffin.”
(The Grave)
- ・“Well, be thankful you don't have five.” (A Circle in the Fire)
- ・“Put the sword across my lap, damn you, where it'll shine.”
(Late Encounter with the Enemy)

この種の設問を数多く用意するほかは、場合によって（多くの短篇を読んだとき）最も興味を感じた小品の題名を挙げさせ、何故面白く思ったか、その理由を書かせる。

また、どうしても直接的な理解をみたい場合、「和訳せよ」という設問形式をとらず「翻訳せよ」という形をとることもまれにはある。よくこなれた日本語で、理解の程度を示してほしいからである。

要するに、直接英文を通して理解し、味ってくれるよう仕向けることに力を注いで、評価のための出題を工夫している。

最終的な成績は、上記の期末テストの結果と、提出物（レポート）によつて算出する。その比率は、テスト90％、レポート10％とする。

学習の結果よりは、学習のプロセスを重んじているが、大多数はごく素直に従ってくれるので、講読の場合よりは到達度は高いようである。

お わ り に

自己流に実施している「英米文学演習」の概要を駆け足で述べたが、喰いたりたいものがあることは充分承知している。未だなし得ていないことの第一は、他教科目（英語関係）の目標を明確におさえることである。第二は「話せる英語」「役に立つ英語」の能力をつけるための最少要素は何かを見極めることである。短い2年間の課程で無駄のない、しかも自己の向上が自覚できる学習プロセスを学生に踏ませることこそ、われわれ短期大学教師に課せられた役

目であって、そのためには、担当教科目をこえた広い視野での検討がまだまだ必要である。当分試行錯誤は続きそうである。

(本学教授)